

平成 23 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520310

研究課題名（和文） 敬意表現に関する日独対照社会言語学的考察

研究課題名（英文） A contrastive sociolinguistic research on politeness in Japanese and German

研究代表者

山下 仁（YAMASHITA HITOSHI）

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：70243128

研究成果の概要(和文):本研究は、観察調査に基づく、日独の買い物表現の分析を目的とする。この経験調査では、実際のインタラクションで使用された言語学的表現ばかりではなく、そのインタラクションを観察した母語話者である研究助手の意見も考察の対象としている。その結果、ドイツ語では、個人的なアドバイスを含めた比較的長い会話が丁寧であると感じられているのに対して、日本語では、手短で簡潔な会話が好まれることなどが明らかになった。

研究成果の概要(英文): This study aims to analyze the sales conversation in German and Japanese on the basis of an observation survey. This empirical study considers not only linguistic expressions that were used in the actual interactions, but also opinions of the native speakers (research assistants) and their comments on the observed interaction. The result revealed the Germans regard a long conversation with personal advices as polite, while the Japanese prefer a more concise businesslike conversation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,200,000	720,000	3,920,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・独語学

キーワード：独語、言語学、社会学、社会言語学、対照言語学

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 背景

国内の先行研究としては、国立国語研究所が1984年に出版した「言語行動における日独比較」があり、日独対照研究に関しては大学書林から1985年に出版された「日独語対照研究」がある。ドイツ語の敬意表現に関し

ては川嶋淳夫の「ドイツ語の敬語」がある。

国外の先行研究としては、ドイツ語圏ではウルリヒ・アモン編集の「対照社会言語学」が1996年になって、ようやく出版された。敬意表現もしくはポライトネス関連の研究書はきわめて多いが、最も重要なのは、英語圏での古典ともいえる Brown と Levinson

の "Politeness: Some Universals in Language Usage" (1987) であり、さらには Gino Eelen の "A Critique of Politeness Theories" (2001) がある。それら以外にも、申請者が行ったいくつかの調査の蓄積があり、そうした研究が本研究開始当初の背景となる。

(2) 動機 上記の先行研究や自らの調査を踏まえ、より具体的に実際のインタラクションで用いられた言語表現と、そのインタラクションを観察した母語話者によってなされた評価をもとに、いかなる言語表現がいかなる評価概念と結びつくのか、ということを解明しようと思い、この研究に至った。

## 2. 研究の目的

日本語とドイツ語による「買い物」や「質問」などの具体的な発話行為に関する、参与観察調査で得た言語データのうち、これまでに分析されていなかった部分を取り上げ、いかなる言語表現や言語学的特徴が、いかなる評価概念と結びついているかを解明し、その分析結果をできるだけドイツ語で発表することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 個人による考察には限界があるため、多角的な視点からの問題の解明を行うべく、ドイツ人や日本人の研究者とさまざまな意見交換を行う。

(2) 日本およびドイツにおいて新たな被調査者を募り、得られた言語データと評価概念との関連性についての調査を行う。また、敬語研究が日常生活のコミュニケーション行動に及ぼす影響についての調査を行う。

(3) 批判的談話分析などの手法を用いて、敬意表現や敬語に関する談話を分析する。

(4) 国際的な学会や研究会での発表を通して、段階的に研究成果を積み上げていく。日独にとどまらない、さまざまな国の研究者と議論することにより、多様な視点からの分析の手がかりを得る。

(5) ドイツ語と日本語を比較対照する場合の基準について考察するため、インターネット、メール、外国人とのコミュニケーションの現場などにおけるコミュニケーション行動について議論する。

## 4. 研究成果

本研究は、日本語とドイツ語の談話に見られる敬意表現を、評価概念をもとにした実態調査によって解明することを目的とした社会言語学的考察であり、いくつかの領域において成果を上げることができた。以下、時系列順にそれらの成果について記す。

### (1) 平成18年度

それまでの調査結果をまとめ9月、ドイツのミュンスターで行われた第37回応用言語学会(37. Jahrestagung der Gesellschaft für Angewandte Linguistik - Westfälische Wilhelms-Universität Münster)の社会言語学部会で、「日本語の標準語化での敬語の役割」(„Die Rolle der Höflichkeitsformen bei der Standardisierung der japanischen Sprache“)という題目の研究発表を行った。この時、招待講演を行ったコンラート・エーリヒ教授と、その講演内容であった「グローバル化と言語学」について議論する機会を得た。エーリヒ教授は、本研究のテーマであるポライトネスの領域でも非常に重要な貢献をしており、この時の議論と、部会で発表した内容を「グローバル化と言語学」という論文にまとめて発表した(『ことばと社会』第10号)。その他、植田晃次・山下仁編著『「共生」の内実』(2006年三元社)に「共生の政治と言語」、渡辺学(編)『ニューメディアに映じたドイツ語の最前線』(2006年日本独文学会研究叢書046号)に「ドイツ語メーリングリストの特徴 - 呼びかけと結びのことばに関する社会言語学的考察」、そして、ましこひでのり編著『ことば/権力/差別』(2006年三元社)に「ポライトネス研究における自明性の破壊にむけて」などを発表した。この年度の成果は、ポライトネス研究という、通常はミクロの問題設定としてとらえられている現象を、言語政策、言語計画、そしてグローバル化など、マクロ社会言語学のテーマと関連させてとらえる可能性を明らかにした点にある。

### (2) 平成19年度

この年度もそれまでの成果をまとめ、年度末であった平成20年2月15日、イタリアのローマで行われた第3回イタリアドイツ語学会の社会言語学のセクションにおいて、「日本における第二次世界大戦後から現在に至るまでの敬語の役割」(„Die Rolle der Höflichkeitsformen nach dem Zweiten Weltkrieg bis zur Gegenwart in Japan“)という題目で発表した。この時には、特に、ザルツブルク大学のグドゥルン・ヘルト教授、DAAD(ドイツ学術交流会)の顧問であるヴッパータール大学のエヴァ・ノイラント教授、ウルビーノ大学のクラウス・エアハルト教授らとの公私にわたる場面での議論が有益であった。さらに、アルゼンチン・コルドバ大学のモーザー博士にも研究内容を評価して頂き、次年度の共同研究の可能性について話した。この発表の理論的側面の基礎となったものは「日本における言語政策の対象としての敬語表現、国会議事録、オンライン新聞、ブログおよびフォーラムの分析をもとにして」(„Höflichkeitsformen als Gegenstand

der japanischen Sprachpolitik – analysiert in den neuen Medien; Parlamentsprotokollen, Online-Zeitungen, Blogs und Foren“ ) という論文にまとめて発表した(『ドイツ文学』に掲載)。その他、活字となったものとしては、大阪大学言語文化共同研究プロジェクト2006『批判的社会言語学の展開』に「批判的社会言語学の展開について」などがある。この年の成果は、ニューメディアとポライトネスの関連などについて考察した点にある。

#### (3) 平成20年度

この年は、6月の末に出張し、DAAD(ドイツ学術交流会)の顧問ヴッパータル大学のエヴァ・ノイラント教授およびデュースブルク大学のウルリヒ・アモン教授と本研究について議論し、ドイツ滞在中に簡単な実態調査を行った。この時、ドイツにおける実態調査が、きわめて難しいことが明らかになった。とはいえ、この二人の助言に従い、また2008年の2月にローマで行われたイタリアドイツ語学学会で行った研究発表を踏まえ、2008年8月には日本の金沢で開催された国際学会であるアジア・ゲルマニスト会議においてKontrastive Soziolinguistik und Grenzüberschreitung、という内容の研究発表を行った。ここにもヴッパータル大学のエヴァ・ノイラント教授が参加してくださり、本発表を評価し、後に2010年ポーランドのワルシャワで開催されるIVG(国際ゲルマニスト学会)の大会における敬語セッションのコーディネーターとして参加するよう申し込まれることになった。イタリアで発表した内容は題名をHöflichkeit, Freundlichkeit und Distanz – Gedanken über die Beziehung zwischen Höflichkeitsforschung und DaF-Unterricht anhand einer empirischen Fragebogenerhebung と変更して論文の形にして発表した。さらに、『言語文化への招待』(2008年 大阪大学出版会)には「日本語の多様性と共生を生きる日本社会」、言語文化共同研究プロジェクト2007には“Höflichkeitsform als Gegenstand der japanischen Sprachpolitik“などを発表した。この年度の成果としては、非言語的な要素がもつ、評価への影響力の強さを示すことができたことが挙げられるが、そうなると、言語表現のもつ影響力が弱いとも解釈され、さらに言語学的な分析の可能性について考察しなければならないことが再確認されたのであった。

#### (4) 平成21年度

日本において、敬意表現や敬語、方言などに関する言語学上の研究が、日常における言語生活にいかなる影響を与えているか、また外国語教育・外国語学習にどのような影響を与えているかについて考察した。特に敬語に関

する日本の言説・談話を批判的に見る上で、批判的談話分析を応用した研究が重要であると考え、その基本的文献であるMethods of Critical Discourse Analysisという本をベルリン自由大学の野呂香代子らとともに翻訳した。また、敬意表現や敬語の使用が洗練された言語使用として考えられるとすると、その対極にあるのは、読み書き能力というリテラシーの問題がある。「日本におけるリテラシーは問題がない」という言説は、「敬語は日常生活にとって有益である」という言説と同様、現実の言語使用を隠蔽するような、ある種の機能を持っている。そうした問題とも絡め合わせ、敬語使用と敬語意識とも密接な関係があると思われる言語意識に関する研究会を行い、こうした問題について渡辺学、高田博行といったドイツ語研究者と研究報告書としての論文集を出版することになった。これも本研究の成果であると思われる。その他、学習院大学や大阪大学において、敬語やポライトネスに関する研究会、勉強会などをとおして、東洋大学文学部の三宅和子教授ら、日本語関係の研究者とも意見交換を行った。これらの議論を通じて、ドイツ語と日本語を比較対照する場合の基準などを考慮する必要はないのではないか、ということが確認された。

#### (5) 平成22年度

7月末から8月上旬にワルシャワで開催されたIVG(国際ゲルマニスト会議)敬語セッションに、ヴッパータル大学のエヴァ・ノイラント教授とウルビーノ大学のクラウス・エアハルト教授とともに運営委員として参加し、「買い物における会話にみられる丁寧表現 日独対象社会言語学的考察」“Sprachliche Höflichkeitsformen beim Verkaufsgespräch: eine kontrastive soziolinguistische Untersuchung Deutsch und Japanisch“という題目で本研究の成果を発表した。特に重要な点としては、ドイツ語では、個人的なアドヴァイスを含めた比較的長い会話が丁寧であると感じられているのに対して、日本語では、手短で簡潔な会話が好まれることなどが明らかになった点である。ノイラント教授とエアハルト教授とは、この会の参加者を中心にした執筆者陣による論文集のため、継続して編集作業を行っている。その後、神奈川県で開催された語学ゼミでも、参加していた研究者と活発に議論を交わしてきた。また、前年度に学会で行ったシンポジウムの内容が山下/白井(編)『話しことば研究の射程』に、「日本におけるリテラシー神話とその社会的機能」“Japan's literacy myth and its social function“が、Heinrich and Galan 編 Language Life in Japan に掲載された。その他「言語の隠蔽機能」が山下・渡辺・高田編著『言語意識と社

会』(2011年 三元社)に、「呼称表現の研究からポライトネスの対照社会言語学的研究へ」が言語文化共同研究プロジェクト 2009 に掲載された。

(6) 全体のまとめ

本研究では、基本的にはかつて収集したデータを多角的な視点から分析することを目的とし、さまざまなレベルからポライトネス、敬意表現、敬語といった言語現象を日本語とドイツ語とを比較対照することでとらえようとした。ドイツ語と日本語を比較するうえで、日本語の敬語が「特殊」なものであるという言説や、日本における、国語政策、もしくは言語政策の一環としての国語審議会や国語分科会敬語小委員会などの活動があり、同じレベルでの分析が難しいことから、まず、マクロ言語学的な観点からの考察を行った。次に、ニューメディアという新たな領域において、メールやブログなどで敬意や敬語がどのように表現されているのか、という問題へと移行し、科学技術の発展と言語使用、言語意識との関連といった課題についての考察を試みるようになった。そのような、いわば敬意表現という問題を取り巻く、外枠からの考察と同時に、データの分析の方法についても考えてみたが、これまで以上に、母語話者のコメントに注目するべきであるというノイラント教授らの助言に従い、コメントを中心に分析してみた。その結果、具体的な敬語などが使用されている言語表現よりも、非言語的な表現、つまり笑顔であったり、やさしいしぐさのようなファクターが、重要な意味を持つことが明らかになった。また、敬語とは逆の方向性での「失礼さ」、さらには「リテラシー(読み書き能力)」の問題について考察してみると、言語学者が前提としてきたいくつかの「自明性」や「神話」とさえ言う言説の問題も明らかになった。それらの問題をまとめるのが、「言語意識」という概念であり、言語意識に及ぼす言語研究者の言説などについても、考察することになった。最終的には、再び言語データの分析に立ち戻り、それぞれの具体的な談話がどのくらいの長さであったのか、という極めて基本的な、物理的側面を考慮に入れて分析してみた結果、日本語では、長い会話はあまり丁寧とは評価されず、むしろ簡潔な表現が好まれることなどが明らかになった。

今後の展望としては、最近のドイツで取り上げられている、Gesprächskompetenz すなわち、会話能力、という概念と、敬意表現、ポライトネスとの関連、あるいは、その会話能力の具体的な要素がいかなるものであるか、何によって構成されるのか、といった問題とも関連付け、さらに研究をすすめていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

山下仁、呼称表現の研究からポライトネスの対象社会言語学的研究へ、『言語文化共同研究プロジェクト 2009: 批判的社会言語学の展開』、査読無、2010年、29-41

山下仁、日本の読み書き能力の神話、社会言語学、査読有、第 号、2009年、195-211  
Hitoshi Yamashita, Literacy Mythos in Japan、言語文化共同研究プロジェクト 2008: 批判的社会言語学の実践』、査読無、2009年、27-41

Hitoshi Yamashita, Höflichkeitsformen als Gegenstand der japanischen Sprachpolitik - analysiert in den neuen Medien; Parlamentsprotokollen, Online-Zeitungen, Blogs und Foren、ドイツ文学(日本独文学会編)、査読有、136号、2008年、65-84

山下仁、グローバリゼーションと敬語研究、ことばと社会、査読有、第 10 号、2007年、136-158

山下仁、批判的社会言語学の展開について、『言語文化共同研究プロジェクト 2006: 批判的社会言語学の展開』、査読無、2007年、1-15

山下仁、ドイツ語メーリングリストの特徴 - 呼びかけと結びのことばに関する社会言語学的考察、日本独文学会研究叢書 046、査読無、2006年、57-70

〔学会発表〕(計 9 件)

山下仁、「多言語化現象に関する社会言語学的研究のいくつかの方法について」、多言語化現象研究会、2010年10月23日、国立民族学博物館

Hitoshi Yamashita, „Sprachliche Höflichkeitsformen beim Verkaufsgespräch: eine kontrastive sozio- linguistische Untersuchung Deutsch und Japanisch“ IVG 2010, Sektion 42, 2010年8月5日、ワルシャワ大学(ポーランド)

山下仁、「日本語とドイツ語のポライトネスについて」渡辺学科研、日独対照ポライトネス研究会、2010年3月3日、大阪大学

山下仁、「ドイツ語研究の魅力を語る」、学習院大学大学院 ドイツ語ドイツ文学専攻主催連続講演会、2010年2月21日、学習院大学

山下仁、「コミュニケーション行動における敬意表現の日独比較」、日本独文学会 2009年春季研究発表会 シンポジウム 「話しことば研究の射程」、2009年5月30日、明治大学

山下仁、「社会言語学のいくつかのテーマとそれらに関する共同研究の可能性につい

て、「社会と行為から見たドイツ語」研究会、  
2009年3月18日、学習院大学

Hitoshi Yamashita, „Kontrastive  
Soziolinguistik und Grenzüberschrei-  
tung“, Asiatische Germanistentagung 2008,  
2008年8月29日、金沢星稜大学

Hitoshi Yamashita, „Die Rolle der  
Höflichkeitsformen nach dem Zweiten  
Weltkrieg bis zur Gegenwart in Japan“, 3.  
Deutsche Sprachwissenschaft in Italien,  
2008年2月15日、ローマ大学(イタリア)

Hitoshi Yamashita, „Die Rolle der  
Höflichkeitsformen bei der Standardi-  
sierung der japanischen Sprache“, 37.  
Jahrestagung der Gesellschaft für  
Angewandte Linguistik, 2006年9月22日、  
ミュンスター大学(ドイツ)

〔図書〕(計7件)

山下仁/渡辺学/高田博行(編著)、三元社、  
『言語意識と社会』(言語の隠蔽機能)、2011、  
139-166

Patrick Heinrich/Christian Galan  
(Hrsg.) Routledge, Language Life in  
Japan: Transformations and Prospects,  
„Japan's literacy myth and its social  
functions“, 2011, 94-108

Claus Ehrhardt/Eva Neuland (Hrsg.)  
Peter Lang, Sprachliche Höflichkeit in  
interkultureller Kommunikation und im  
Daf-Unterricht, Sprache Kommunikation  
Kultur, Soziolinguistische Beiträge,  
„Höflichkeit, Freundlichkeit und  
Distanz – Gedanken über die Beziehung  
zwischen Höflichkeitsforschung und  
Daf-Unterricht anhand einer empirischen  
Fragebogenerhebung“, 2009, 115-130

金崎春幸・木村健治共編、大阪大学出版会、  
『言語文化への招待』(日本語の多様性と  
共生を生きる日本社会)、2008、161-174

ましこひでのり編著、三元社、『ことば/  
権力/差別』(ポライトネス研究における自  
明性の破壊について)、2006、165-191

植田晃次・山下仁編著、三元社、『「共生」  
の内実』(共生の政治と言語)、2006、  
157-185

仙葉豊・高岡幸一・細谷行輝編、英宝社、  
『言語と文化の饗宴』(メーリングリストの  
ドイツ語 - ドイツ語の新たな表現形式につ  
いて - )、2006、319~338

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山下 仁 (YAMASHITA HITOSHI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授  
研究者番号：70243128